

こんなに、と言うのは料理内容なのか、それとも量なのか。どちらものかもしれない。とは言っても炒めるだけの焼きそばだし、育ち盛りに類する帝人の年齢ならば、そこまで大量でもないはずだ。けれど帝人の話から察すると、彼にとつてはごちそうと言えるのかもしれない。

「そうか」

今日、あのスーパ―に行つて良かった、と内心で静雄は思う。そして帝人が結構無鉄砲な性格で、自分に声をかけてくれて良かった。なんというか、心がじんわりと優しい気分になった。

「明日もあのスーパ―に行くのか？」

「そうですね。当分毎日通うつもりです。静雄さんのおかげでモヤシが四袋あるので、当分は生きていきますけど」

モヤシ四袋で『当分』とはどんな食生活なのだろう。しかも米は重湯程度。一食につき一袋ならば一日と少ししかもたないので『当分』とは言うまい。

疑問に思つて問うと、恐ろしいことに帝人は現在一日一食生活なのだそう。

「朝と昼は水です」

「良く倒れなねえな」

感心半分、呆れ半分で言うと帝人は苦笑を浮かべて言った。

「初日は倒れそうになりましたけど、人間の体つて案外丈夫だし、慣れますから」

つまりこの生活は昨日今日の代物ではないらしい。

心底驚きつつ感心し、そして呆れた。思わずまじまじと静雄は目の前の少年を見つめる。

細い。か弱そう。いとけなくも見える。
(やつぱり、放つておけねえよな)

「あのな、竜ヶ崎」

「竜ヶ峰です」

どうも自分は彼の名前が覚えにくいらしい。内心で竜ヶ峰竜ヶ峰竜ヶ峰、と三度唱えた。これでたぶん忘れない。たぶん。

「……竜ヶ峰。お前、しばらく俺が食費出すから、ここで夕飯食つて行け」

「えっ、そんな、申し訳ないですしそんなご厄介になるなんてできないですっ！」

「良いから年上の言うことは聞いとけ。飢え死にしてねえか俺が気兼ねすんだ」

慌てた様子で遠慮するが、帝人の言い分に頷く気は欠片もなかった。だってこのまま彼を家に帰したら、自分はきつと帝人がどうしているのか気になって気になって仕方ない。

ちゃんと食べているか、腹を空かせてないかと、まるで母親のように思つてしまうだろう。ならば、毎晩この部屋で食事をさせた方が自分の心理的負担は圧倒的に少ないというか、安心だ。

「でも」

「迷惑か？」